吉田有理　福島民報　連載コラム

圏外のアンテナ

［平成最後の］の巻

昨年末をピークにして、あらゆる行事やイベントが「平成最後の」という言葉を、頭の上にのせて通り過ぎていった。

クリスマス、初日の出、成人式、センター試験……。

気軽なやつでは、婚活パーティ、ダイエット、プチ整形までが、「平成最後の」付きで語られていた。

昨年の初夏、「平成最後の夏だから、旅に出ます！　」と若い友人が口にするのを聞いた時は新鮮で、なるほど〜と思った。

だが、この言葉が消費されるスピードは速かった。わたしのように言葉フェチな人間は、ただ目を白黒させながら眺めていた。

ひょっとしたら、このフレーズが大流行した背景には、今の人たちが持つ「さよならエネルギー」の強さが関係していたのかもしれない。

この「さよならエネルギー」、数年前、東急東横線渋谷駅の最後の日に出くわした時にも感じた。泣きながら、夢中で電車に手を振る人々の姿は、あまりにもやるせなく、「時代の終わりを惜しむこと」への熱量は、驚くほど高かった。

歴史をさかのぼってみると、元号は今までに247個（諸説あり）。明治以降は一世一元になったので長いが、一つの元号の長さの平均を計算すると、約５年半である。

元号が使われ始めたばかりの奈良時代は、瑞雲（ずいうん）を見たとか、金や白亀や白キジが献上されたとか……。吉事にかこつけて、よく改元されていたようだ。

平安時代の半ば以降は、日照りや火災、すい星や流行病などの凶事が、しばしば改元の理由になった。

そのような年号と比べたら、31年というのは、もの凄く長い。そして、人々の日常生活の中に根付き、こんなに最後まで惜しまれる元号というのも、きっと珍しいに違いない。

人々の「さよならエネルギー」を内に秘めて、「平成最後の」（あ、ついうっかり！）冬が過ぎようとしている。

=２０１９年１月２５日掲載=

渋谷ロフトでバカ売れした２５０円の「平成ノート」。残りはもうわずか